

一般病棟で「精神科の薬」の知識が なぜ必要か

「精神科の薬」。ほとんどの看護の現場ではこれと関わっています。一般病棟では「睡眠薬」が代表的な「精神科の薬」という病棟もあるかもしれませんが、精神疾患の治療目的で「精神科の薬」を服用中の患者が他の疾患の治療目的で一般病棟に入院し、そこで抗精神病薬を含めた与薬業務を行なうことはめずらしくありません。

また、入院患者の夜間せん妄に対して内服薬や注射薬で「精神科の薬」が使われています。夜間の看護管理責任者として病棟をラウンドすると、眠れない患者や眠らない患者の夜間の安全の確保と安楽な療養のために、現場のスタッフたちが試行錯誤している場面によく出会います。また、高血圧や糖尿病に代表される生活習慣病など複数の疾患を抱え、それぞれに処方された複数の薬を使用している患者の入院が増えていますが、ここ数年、一般病棟の入院患者が入院前から使用している薬のなかに「精神科の薬」が含まれる割合も増えていきます。

看護管理者の場合は、部下の労務管理に関連して「精神科の薬」の知識が必要な場合があります。交替勤務で看護の仕事に従事している看護師のなかには、睡眠障害のために睡眠薬を服用している場合や、気分が落ち込み仕事に影響するために薬物療法を受けている場合があります。部下が服用している「精神科の薬」が、本人の苦痛の緩和や生活状況の改善に効果的に作用することは少なくありません。しかし、「精神科の薬」の服用が、「勤務予定通りに出勤できない」「業務に集中で

きない」など、割り当てられた仕事の遂行に影響するケースもあります。こうしたときに、看護管理者は「精神科の薬」に関する知識をもとに適切に対応することが求められ、それが労務管理上重要な判断となることも少なくありません。

なぜこれほど わかりやすく解説されているのか

本書では、睡眠薬や抗精神病薬などの「精神科の薬」を10領域に分けて「〇〇薬がわかる」ように解説されています。薬の名前に焦点を当てて薬剤の詳細を手早く把握する本としては情報量に限りがあります。しかし「〇〇薬」が用いられる主な疾患や症状について領域ごとに整理されており、主に用いられている薬の種類とその作用についてわかりやすく解説されています。特に「精神科の薬」の使用に関して患者からよく受ける質問に対するQ&Aは、回答もさることながらバラエティーに富んだ質問は参考になります。本書の帯の「“ざっと” 知りたいあなたへ」、まさにその通りの内容です。

本書に紹介されている治療アルゴリズムと治療概念図と題したフローチャートは、精神科領域における知識モデルの例ですが、「“ざっと” 知る」にはこのような知識モデルを利用した表現がぴったりです。

本書は患者の看護にあたる看護師から、「精神科の薬」を使用している部下の労務管理を担当する看護管理者まで、さまざまな場面で「精神科の薬」に関する知識を整理するために役立つことでしょう。



精神科の薬がわかる本

姫井昭男
定価 2100 円
(本体 2000 円 + 税 5 %)
医学書院
TEL. 03-3817-5657

この1冊で丸わかり！「精神科の薬」

伊豆上智子 東京医科歯科大学医学部附属病院看護部

評
BOOK